

「外山ヶ原」で青春謳歌

文人の 武蔵野

明治の終わり頃、若山繁と土岐善麿という二人の大学生が早稲田の地で出会い、意気投合します。文学仲間と北斗会をつくり、小説の創作批評をおこない、回覧雑誌を発行しました。また、当時流行していた武蔵野散策のために、土岐らが「外山ヶ原」と呼んだ現在の戸山公園や「百草の丘(京王百草園)」を足しげく訪れました。昼間から放歌、放吟、狼藉とみなされ兵隊に怒鳴られながらも青春を謳歌していたのです。

若山牧水と土岐善麿 ①



牧水と土岐が武蔵野散策として通った現在の戸山公園(新宿区で)

そんな二人のもとに、あるとき吉報が舞い込みます。「読売新聞」別冊(日曜版、文芸付録)に設けられた「むさし野」と題する小欄に、それぞれ牧水と湖友の名で短歌の新作を発表できることになったのです。およそ半年の間に100首にのぼる「むさし野」

短歌が連載されました。連載後、卒業と同時に牧水は第1歌集「海の声」を上梓します。土岐もまた卒業後に第1歌集「NAKIIWARAI」を哀

果名で出版し、分ち書き短歌の祖として、石川啄木の三行書きに影響を与えます。その後の牧水は、旅と自然と酒を愛して創作に打ち込み、9000首余りの歌を遺して43年の生涯を閉じます。伊藤一彦編「若山牧水歌集」でその秀歌を味わえますし、恋の歌人としての側面は俵万智「牧水の恋」で楽しむことができます。

長寿に恵まれた土岐(1885~1980年)は、歌人として、また駅伝の発案者、文学研究者、国語審議会会長などとして幅広く活躍します。牧水の没後には「武蔵野時代」と名付けた回想録を著し、冒頭のエピソードを紹介

しています。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「若山牧水歌集」

牧水(1885~1928年)が遺した歌の数は「万葉集」の2倍ほど。そこから1700首を選び、牧水の書画(表紙)、略年譜、解説、初句索引を付した1冊がこの「若山牧水歌集」です。激しい恋歌も旅の歌も家族の歌もあり、武蔵野や多摩川を詠んだ歌も収録されています。



(岩波書店提供)